

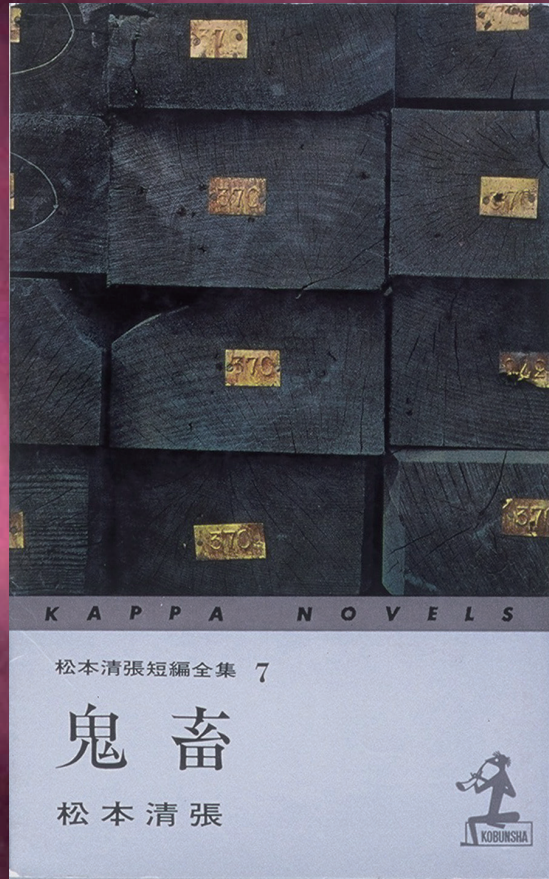
松本清張記念館

◆館報◆

2021.3
第65号

「これで、あんたも一つ気が楽になったね」とお梅は宗吉に云った。眼もとに微かな笑いを見せた。近ごろ、減多に無いことであつた。

「医者は死亡診断書をかいた。病み衰えたこの子の死に、医者は疑問をもたぬようだった。宗吉は安心した。」



『松本清張短編全集7 鬼畜』昭和39(1964)年
光文社カッパ・ノベルス
『鬼畜』は、「別冊文藝春秋」昭和32(1957)年4月号に掲載された。

現在入手しやすい本
『張込み 傑作短編集5』新潮文庫、
松本清張全集36巻など

目次

記念館開館22周年記念講演会	2
企画展レポート	5
『松本清張研究』第22号発刊	5
展示品紹介	6
点描 作品の舞台を訪ねて	6
第22回松本清張研究奨励事業入選企画	7
友の会活動報告	7
トビックス	8

作品紹介

腕のいい職人の竹中宗吉は、小さな印刷所を経営している。しつかり者の妻・お梅の助けもあり、商売が順調に伸びていくなか、宗吉は仕事に使う料理屋で菊代という女を知る。「男好きのする」菊代に夢中となった宗吉は「細密な用心」で逢瀬を重ねていた。

八年後、印刷所が手詰まりになった宗吉夫婦のもとへ、三人の子を引き連れた菊代が乗りこむ。つりあがった眼を光らせ傲然とした態度のお梅と、なすすべなく頭を抱えるだけの宗吉に逆上した菊代は子らを残し出奔する。途方に暮れる宗吉に、お梅の「これは、あんたの子かえ？」似てないよ。」という冷たい声が響く。

最初は幼い末っ子だった。栄養失調で臥せていた次男の顔に古毛布がかかったのは事故か故意か。次は長女。父とお出かけに心弾ませる四つ子の娘は東京のデパートに置き去られる。

子どもがひとり「片つく」ことに妻は昂ぶりをあらわにし、宗吉は重荷から解放されていく。「しかし、もう一人残っている！」——聡い長男をどう始末するか……。

小心で平凡な人間が鬼畜の所業に手を染めていくさまを短文の叙述で畳みかけ、数度にわたり映像化されている。野村芳太郎監督による映画版（一九七八年）では、「砂の器」で純良な警察官に扮した緒形拳が竹中宗吉を、岩下志麻がお梅を演じた。宗吉が経営する印刷所のリアルな描写には、松本清張自身が若いころ印刷工として働いた経験が活かされ、鮮やかな幕切れにつながっていく。

ない人間なんだと思って、役者はダメだと止めました。こんどは漫才をしようと思って、『セクシオン34』というコンビを組みました。このときも高校生。ネタがすぐくしようもなく、すべり倒したんですね。多感な時期に、舞台上上がって笑い声が聞こえない状態で五分間漫才するって、けっこうな地獄なんですよ。帰りのバスの中で、相手と「そろそろ受験勉強しよか」と言っただけで解散になりました。

十九歳のときに、私は自動車の運転免許を取りに行きました。学科の授業の前に、早く着いたので教室の前で、藤原伊織さんの『テロリストのパラソル』という小説を読み始めました。江戸川乱歩賞という新人賞をとって、そのまま直木賞までとったという、伝説の作品です。あまりにも面白くて、気がついたら、授業が終わっていた。やっと思つたと思つた。あれだけ松本清張を読み聞かせされたのに、灯台下暗しで、何でこの「小説」に気付かなかったのか。持ち運びができて、こんなに軽くて、自分のペースで楽しめる。自分が監督でのシーンも全部、自分で考えられて、妥協しなくて書ける。自分が求めていたのはこれだと思つた。

十九歳のときに、最初に書いた推理小説はそれまで一回も出て来ない人間が犯人という「画期的な小説」でした。それを読んだときの友達の顔が忘れられないんですが、「おまえ、才能ないから止めとけ」と言われました。これが私のスタートでした。それから実際に賞を取るまで十二年、干支一回り、ずつと書いてました。何故書けないかと考えてみたら、やっぱり圧倒的無知、何も世の中のことを知らない、人脈もない。だから新聞社に入って勉強しよう、私は就職活動を新聞社から新聞社に入りました。結局、地元神戸新聞社に入社して、十年間、記者を勤めて勉強し続けました。もちろん作家になるというのは内緒です。ですから、記者になった最初の取材から、私の「取材ノート」には目次が入っているんです。何々の取材、何月何日。こういう目次があったら、作家になつたときに、「あの取材、面白かつたな」と思つたら、一発で引ける。今もそのノートを見ることはありませんが、字が汚すぎて読めない。

記者八年目、三十一歳のときに、将棋担当記者で得た知識を活かしまして、『盤上のアルファ』という、棋士を主人公にした小説を書きました。これが講談社の第五回「小説現代」長編新人賞をいただいたので、やっつとデビューできたわけです。

小説「罪の声」

九作目、いよいよもう後がなくなってきました。実は、デビューしたときに担当になった編集者は、「小説現代」の編

集長をしてる塩見さんという人で、デビュー間もないころ、彼にあるアイデアを言ったんですね。「グリコ・森永事件」というのがあった。食品会社、製菓会社六社を「かい人21面相」という犯人グループが恐喝する事件。最初に社長を誘拐して、そのまま社長の会社を放火して、最終的には青酸ソーダ入りの毒菓子を食べらまいていくというような、一年五か月におよぶ大事件に発展していった。それが結局、未解決に終わったという劇場型犯罪なんです。調べれば調べるほど、なぜ未解決になったのかがまったく分からない。これほど証拠が残っていて、証人がたくさんいるのに何故だろうと思つて、私は昔からこの事件に興味があつたんですね。

「キツネ目の男」という容疑者がいる。この顔が当時、四歳、五歳の私には、本当に怖かった。そして、母親から「お菓子食べたらあかんぞ」と言われた。そういうのが強烈に記憶に残っていたので、事件関連の本をよく読んでいた。だから、大学三年生のときに、この犯罪の変なところに気づいたんです。犯人たちは子どもの声を録音したテープを使っています。受話器を取ると、いきなり録音した子どもの声が出ていくわけです。当時、利用された子どもは三人いたのではないかとされていて、中学生ぐらいの女の子、それと小学校低学年ぐらいの男児、未就学児という三人。この未就学児と私は同世代で、同じ関西に生まれ育つた。本でそれを知ったときに、パッと周りを見渡したんです。自分の人生の中で、この子どもとどこかですれ違つているかも知れん、と思つた瞬間、この子どもは利用されたことを知つた。たんやらか、とそういうことを考えだしたら、止まらなくなつたんです。この子どもたちの人生を書きたいと思つたのが二十一歳のときです。ただどう書いたらいいのかわからないので、ずつと温めていたわけです。

年月が経ち、小説家としてデビューし、満を持して、この子どもの人生を書きたいと塩見さんに話すわけです。これを



聞いたときに塩見さんは「それは面白い」と、「確かにすごい小説になる、ただ今の塩見さんの筆力では書けない」と言われたんですね。確かにそのとおりで「わかりました」と言つたら、「ただしこのネタは講談社のネタなんだ」と、「もう聞いた以上、講談社のネタなんだ」と、「分かるね」と言われて、「はい」と、「ほかの出版社に言うたらいかんよ」と、出版社の厳しさを学んだわけです。(会場笑い)

売れない八作があつて、2014年の暮れ、塩見さんと、そのときの担当だった、現在「群像」の編集長をしている戸井さんという人、二人が私が住んでいる京都にまで来てくれて、「これまでの八作で塩田さんが人間を書くこと、エンターテインメントを書けるということはよく分かりました。この九作目から社会と対峙しなければならぬんじゃないか。社会に向けて小説を書かなければならぬんだと思う。預かつてあるあれ、やりませんか」と、やっつとされたわけです。二十一歳から書きたいと思つて当時も三十五歳、やっつと書く時が来た、と思つたときに、私はすごく怖くなつたんですね。まだ準備が足りない、まだ筆力が足りないんじゃないかと思つたので、「ごめんさい、まだ書けないです」と断つた。

そのあと私も迷うわけです。二か月後、もう一度、同じメンバーで来ました。彼らは週刊誌出身の編集者なので、事件に強い。そのときに、「人事異動でこの二人が異動になつて、次誰かが担当になつたときに、無理でしょ。やるつて言わないですよ」と、「もうこの機を逃したらダメだよ」と言われたんです。二人の言うとおりで、よく考えたら、得てして準備ができたときにはチャンスって回つてこないよなあとと思ひ、チャンスは常に背伸びの状態で掴むものじゃないかなと思つたので、「分かりました、やります」と言つたわけです。そこから『罪の声』という作品が本格的に動き始めました。

すごく大変だったんですね。例えば、この事件をずうつと調べている読売新聞の加藤さんという記者がいるんですね。七十歳を越えられて、今も膨大な量の資料があるわけですね。私も調べて、考えられる犯人の職種とか現場とか、独自資料を十種類以上作つて、リアリティがあるかないか一つ一つ当てていったんですね。そして、加藤さんはいつ一つ「それはありえん」とか、「それは考えられる」とか言われる。そういう形で情報収集をどんどん続けていった。

『株式新聞』という新聞に、社長が誘拐される最初の事件

の二か月前に、その企業の株が上がっているという記事が実はあった。その記事に「ロンドンの外人買い」という言葉があったんですよ。そして、犯人の挑戦状の中に、やたらヨーロッパの都市が出てくる。新聞の「ロンドンの外人買い」という言葉と、これは関係あるんじゃないかと思って、話を聞く。すると「いや、これは黒目の外人買いや」、「黒目、つまり日本人だと、日本人が外国での売買に見せかけたものなんだ」と説明された。「当時は架空口座が作りた放題だったので、スイス経由かもしれないが香港経由の、どちらかで足跡をどんどん消していくということをやったんだ」、「欧州筋の買いと、当時、香港は英国領やろ、つまりイギリスやから欧州筋になるんや」とか、そういうことをどんどん聞いていって、小説にしていってたのです。

この事件の本筋そのものも大変なんですけれども、ここでは登場人物が歩くところをロケハンしていかないとダメなんです。『罪の声』には二人、主人公がいて、一人は京都でテラーをしていて、この人がテープの声の子どもが大入になった人。もう一人は新聞記者で事件を改めて追うという設定です。この新聞記者が調査でロンドンに行く。それを書くために私もイギリスに取材に行くわけです。ロンドン、シェフィールド、ヨークという都市を一人でずうつと歩き回りました。

ヨークに着いてみると、外壁がすごい。昔の、中世のヨーロッパっていう感じの街並みそのまま残っているんですよ。あつ、これだと思った。『罪の声』のクライマックスで、犯人が告白していくシーンに使えろと思ったんです。どうやったらこの長丁場の一年五か月にわたった犯行を告白するっていうシーンを持たすことができるかとずつと考えていて、喫茶店で対面で座っては絶対不可能ですよ。しかしこれを、ヨークの街を二人横に並んで平行に歩いたらいいんだと思ったんですよ。平行に歩いたら告白する側が目線を合わせなくてもいいので、自分のペースで話せる。犯人は狡猾な人間だという設定なのです。相手がどれだけの情報を持っているか値踏みしながら歩くという設定にしたんです。これによってリアリティが担保された。

実際現場に行くと、地図を持ってずうつと歩いていくわけです。現場で、「こら辺でほしいこのシーンのこれを言う」みたいな所を地図に落とすっていいんです。私はそのとき靴が悪くて、夜の八時ぐらいいに、足が痛くてもう歩けなくなった。公園のベンチに座って、夕焼けみたいな白夜の空を見てたときに、「ああ、本当に東の端から西の端まで来てし

まった」と思っていて、「ぼくはこれで完成させられなかったら、小説家としては本当にあかんのやろうな」と心から思ったんですよ。だから、何が何でも完成させる、了の字を打つぞと誓ったんです。そのときの決意は今も覚えていて、本当に自分の中で燃えるものがあつたんです。

そこから三か月ぐらいいで小説を書ききるんですが、全編改稿になりました。さすがに怒りました。書き直しは信用している編集者三人に「それぞれ鉛筆(赤)を入れてもらう」、「それをみて改稿するかどうか判断してくださいませんか」と言われたんです。これは挑戦状だと分かったので受けました。

期限は二週間。届いた三部を読んでいいたら、まあ的確な直しなんです。ここ要らないというのには本当に要らない。中継地のドバイの様子とか「これは紀行文ではないので、別の機会にどうぞ」と。あるいは、笑いを取るシーンで「これって、面白いの？」と書かれていたりする。本当に痛いところを突いてくる。その間に、私、次女が生まれました。病院で次女をあやすんですけれど、自分の子どものことよりテープの子どものことをずうつと考えているわけですよ。それで、やつと三人が何を言わんとしているかという、共通項が分かった。前の原稿はあまりにも事件のインパクトが強いので、犯人捜しに引きずられていた。そうじゃなくて、利用された子ども、曾根俊也の気持ちや展開というのが足りない、それが加われば、もつと面白い小説になる、というのが三人の共通の意見だったのです。また二から組み替えて、四日で改稿しました。

午前三時ぐらいいに終わって、編集者にメールで送り付けて、もう疲れ切ってボケつとしてたらですね、それから二時間後ぐらいい、午前五時ぐらいいに編集者から返信があつた。「これでいけます」と。つまり、午前三時に起きて、メールが着いたら二時間で読んで、すぐに「OKです」と返すということは、編集者の熱もすごいと思うんです。すぐうれしくて、「ああ、自分はすべてやれることはやったな」と思えたんですよ。八月に発売日を迎え、それから一週間後に、編集者から電話で「塩田さん、重版決まりました」、「一万部積みまます」と伝えられた。その一週間後、「また二万部積みまます」と。一万部は大変な重版です。このとき、やつと壁を越えたというか、あ、壁って越えられるんだと思つたのでした。

映画『罪の声』

大阪の弁護士会館で撮影があつたときに、私は見学にお邪魔したんです。そのシーンはテープで利用された子ども

のうち、地を這うような人生を生きてきた、聡一郎という子どもが今大人になって、新聞記者の阿久津とテラーの曾根俊也の前に現れて、これまでの人生を告白するという、もつとも重たいシーンなんです。この聡一郎役の宇野祥平さんという方は、もう見た瞬間、びっくりりましてね。げそつと痩せて、こんな分厚い眼鏡かけて、ちよつと汚れた靴をお履きになって、ひと目見ただけで私の想像していた聡一郎の一段上をいってたんです。うわー、聡一郎だと思つて。その場もピンと張りつめて。役者つてすごいなあつて思つたのは、同じセリフ、同じ告白シーンを角度を変えて何度も撮るんですよ。何度も泣いて何度も鼻水を流すわけなんです。そのとき、喜劇役者を目指して十六歳の自分を想い出して、止めといてよかつたなあと思つたんです。

聡一郎役の宇野祥平さんとは、映画がヒットして、大ヒット御礼会で再会しました。私が「十キロの減量はどうやって痩せられたんですか」と訊いたら、「運動しちやダメだと思つたんです」と言われた。宇野さんは、実はオフアアが来る前に偶然『罪の声』を読んでらっしゃって、聡一郎役をやりたいと思つていらっしゃつた。その描写が気になつて仕方がなかつたらしいです。それで、本当に自分が話 came たので、「スポーツをやつて健康的に痩せては感じが出せない。つまり、食べないということでは痩せられないので、一か月かけて十キロ落としました」と言われたんですよ。もう、頭が下がるといふか、やつぱりプロつてすごいなあと思つて、勉強させていただきました。

この『罪の声』という映画を最初に私が観たのは、今年の夏です。東宝の試写室で観ました。テレビドラマ『盤上のアルファ』『歪んだ波紋』はあつたけれども、映画化は初めてでした。自分の初の映画化作品を観たら、やつぱり書いたときのことを思い出します。そのシーンが出てくる。特に主人公の阿久津、小栗旬さんが歩いている。ヨークの街は全部、私が歩いた所なんです。何年も前に、絶対に成功させろんだという追い詰められた気持ちで、ヨークの街を歩いてきたこともすべて重なつていくんで、涙がばあつと出てくるわけなんです。本当に感謝の気持ちが入り込んでくるわけです。公開して全国の皆さんに観ていただく、最後に「原作塩田武士」のクレジットを観たときに、ああ、あの一回も出て来ない人間が犯人だと思つた。小説を書いていた若造がここまで来たかあと思つて、すごい感慨深かつたのを覚えていています。